

「神話」の比喩的用法について

—コーパス言語学からのアプローチ—

後藤 齊

キーワード：「神話」 比喩 意味の転用 朝日新聞記事データベース

0. はじめに

「神話」という語の第一義を『日本国語大辞典』（小学館,1974）は「原始人・古代人・未開社会人などによって、口伝や筆記体で伝えられた、多少とも神聖さを帯びた物語で、宇宙の起源、超自然の存在の系譜、民族の太古の歴史物語を含むもの。その起源は自然現象を擬人的に解釈しようとしたことや、人類に共通な無意識・下意識の欲求を投影したことにある。たとえば、ギリシャ神話や、日本の「古事記」にある神話のたぐい。」と説明する。かなり長文の解説であるが、ことばの説明というよりは、いわゆる「こと典」的な説明に傾いているように思われる。ギリシャ神話や記紀神話といった外延があまりに明瞭なためであろう。なお、松村明編『大辞林』（三省堂,1988）などこれに相当する語義を二つに細分している国語辞典もあるが、その違いはあまり明確でなく、またこの区分は他の国語辞典の多くでは採用されていない。本論の趣旨からもその必要が認められないので、以下においては、この第一義を「神話①」と表記することにする。

しかし、本稿で主として扱うのは「神話」の比喩的な用法の方である。『日本国語大辞典』では②として「一般には絶対的なものと考えられているが、実は根拠のない考え方や事柄」と解説されている。この語義の「神話①」との関係は同辞典では明記されていないが、これが「神話①」からの比喩的な転用であることは明白であろう。

新村出編『広辞苑』第4版（岩波書店,1991）や市川孝他編『三省堂現代国語辞典』第2版（三省堂,1992）など、最近になってもこの語義を収録しない国語辞典も見られる⁽¹⁾が、これに類する「神話」の比喩的な用法には以下に見るように豊富な実例がある。したがって、この用法は全体としてもはや単なる純粋に修辭的な効果をもつ臨時的な比喩ではなく、かなり定着化の進んだ用法となっていると考えて差し支えない。以下では、この語が比喩的に使われる場合を広く考察の対象とすることにして、「神話②」と表記する。

本稿の目的は、「神話②」の実際の使用例を検討することによって、国語辞典の語義解説の必ずしも十分でない点を指摘し、意味の比喩的な転用の実態をより明確にしようとする

ることである。まず、数種の国語辞典の解説を比べてみて、その間の一致と不一致とを確認する。次に、朝日新聞記事データベースから得た実例を分析し、特に語構成的・統語的特徴および連語的特徴に注目することによって、これがいくつかのタイプの複合体であること、さらに、それぞれのタイプは国語辞典の解説に合致するものもあるが、整合しないものもあること、を指摘する。すなわち、「神話②」の全ての実例を、国語辞典の記載が示唆するような単一（ないしは、ごく少数）の語義に帰することはできない。

本稿は「神話」という特定の一語を考察したものではあるが、比喩的な転用された語義が定着していく過程の一断面を比較的明確に捉えたものとして、コーパス言語学の可能性の一端を示すことにもなるであろう。

1. 「神話②」の定着過程

「神話」という語を比喩的に使うことは、臨時的なものとしては、いつの時代にも可能であったろう。しかし、これが広く定着したのは比較的新しいことであるらしい。国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字（1）』（1962）の語彙表はこの語を挙げていない。これは、調査対象となった1956年の雑誌90種の1年分の記事の中でこの語の出現度数が7回に満たなかったということである。また、同『電子計算機による新聞の語彙調査』（1970）によれば、1966年の一年間に朝日・毎日・読売の3紙の紙面全体の3分の1に相当する部分に、この語が短単位として（すなわち、複合語の一部になった場合も含めて）現れたのは13回にすぎない。この二つの調査では、語が本来的な語義で使われたか、それとも比喩的な用法であるかの区別をしておらず、その内訳は不明である。しかし、この語のすべての語義を合計してもかなり低い頻度でしか現れていないということは、比喩的用法があるにしてもかなりまれであったということを示している。佐藤喜代治編『語彙研究文献語別目録』（明治書院,1983）も「神話」を対象とした文献をあげておらず、この語が興味深いふるまいをする語として研究者の関心を引かなかったことをうかがわせる。

西尾実他編『岩波国語辞典』の第2版（岩波書店,1971）は「神話①」を挙げるのみであるが、第3版（1979）から補足的に「神話②」に触れるようになった。『新明解国語辞典』も第2版（金田一京助他編、三省堂,1974）までは「神話①」を二つの語義に分けて説明していたが、第3版（見坊豪紀他編,1981）からはこの二つを一つにまとめ、改めて新しい第二語義として「神話②」を扱っている。80年代始めまではこの語義に言及しない辞典もまれでないようだが、『日本国語大辞典』（1974）や金田一春彦他編『学研国語大辞典』（学習研究社,1978）は記載する。これらの辞典の記載のありかたからして、「神話」の比喩的用法が十分に定着したと認知されるようになったのは70年代のことであろう。実際に

広く使われるようになったのはそれより少し以前のことであるかもしれない。

中野収『若者文化術語集』(リクルート出版,1987,pp.70-72)はこの語の「若者文化の中での用法」の記述を試みている。しかし、その用法は本稿で言う「神話②」と重なっており、1987年の時点でこれを「若者・新人類」に特有のものと規定するのは無理がある。とはいえ、若者文化や社会風俗現象に深い関心を持つ著者にとっても、この用法が新語的なものと意識されていることが分かる。実際の用例においても、「神話」あるいは「～神話」というように、かぎかっこでくくって表記する例が少なくない。これは、書き手の側に、この用法の比喩的な性格がまだ意識されているということである。

結局、この用法は十分な使用例があり、一般の国語辞典が認知する語義である一方で、新語的・比喩的な用法としての意識も依然として生きているという、興味深い状態にあるといえる。比喩的な意味の転用のありさまを検討する例としては適切なものと言えるであろう。

2. 国語辞典における解説

「神話②」が国語辞典のなかで認知されるようになって20年近くたっており、種々の国語辞典の解説はかなりの一致を示すのであるが、必ずしもそうでない点も見られる。尚学図書編『現代国語例解辞典』(小学館,1985;第2版,1993)と同『小学館国語大辞典』(1981)が「不敗の神話はもろくも崩れた」という例文を加えるだけで、上に挙げた『日本国語大辞典』と同じ説明であるのは当然かもしれない。これと大同小異の説明をするものに『広辞林』第6版(三省堂,1983)、松村明他編『旺文社国語辞典』第8版(旺文社,1992;例として「帝国不敗の神話」)、山田俊雄他編『角川最新国語辞典』(角川書店,1987)がある。これらはいずれも説明文に「絶対的」「根拠のない」「事柄」という語(またはその変形)を含むところが共通している。これとは多少とも違う説明をする辞典として次のようなものがある。(順不同、ふりがなは省略)

人間の思惟や行動を非合理的に拘束し、左右する理念や固定観念。「皇軍不敗の神話に踊らされる」(松村明編『大辞林』,三省堂,1988)

過去において信じられ、すでに信じられなくなった事柄。深い根拠なしに信じられている事柄。<現代の神話>[例文省略]。<革命の神話>[例文省略](林史典他編『15万例文・成句現代国語用例辞典』,教育社,1992)

比喩的に「現代の～」のように、根拠無しで皆が信じている事柄を指すこともある。(『岩波国語辞典』第3版;第4版(1986)も同じ)

かつて・(長い間)絶対と信じられ、驚異の的とさえなっていた事柄。〔多く、現

在は俗信に過ぎないという文脈で用いられる) (『新明解国語辞典』第3版;第4版(1989)も同じ)

神秘的、奇跡的で論理的根拠のない話。(久松潜一他監修『講談社国語辞典』新版,講談社,1982)(阪倉篤義他編『講談社国語辞典』第2版,講談社,1992)はこれに「現代のー」という例を加える)

②一人の英雄・支配者が神格化され、一般民衆のあいだで、絶対的な存在であると信じこまされたもの。「トゴールのーは過去の記念碑と化す」③理念と現実のくいちがいがおおいかくされ、理念が現実には生きているかのように信じこまされたもの。

「民主主義のー」(金田一春彦他編『学研国語大辞典』,学習研究社,1978)

ただし根拠のない、俗説「こどもは無邪気だ、というのはーだ」(見坊豪紀他編『三省堂国語辞典』第4版,三省堂,1992)

物事を概念・理論によって表現するかわりに、神格化・絶対化して物語風に表現すること(山田俊雄他編『新潮現代国語辞典』,新潮社,1983)

国語辞典の解説はほとんど全て「根拠のない」という語を用いていて、「神話②」を否定的にとらえているという共通点がある。また、例文として挙げられるのは「～の神話」の形をとるものが多い。しかし、辞典間にいくつかの不一致もみられる。多くの辞典は「事柄」と説明する中で「物語、話」とするものもある。『学研国語大辞典』のみが人間を指す用法に言及する。さらに、「事柄、話」の内容については限定を加えない辞典の方が多いが、『新明解国語辞典』と『学研国語大辞典』は「驚異、理念」という語でその壮大さないし肯定的性格を示唆しているようである。『大辞林』の「人間の…行動を…拘束」という説明は、他の辞典が多く、人が信じているという心理的な側面からの説明をしている中で異質である。

もとより、数々の国語辞典の語釈が完全に一致することはありえない。それぞれの辞典には個性があるものである。特に、比喩的な用法の場合、可能な使い方を網羅することは事実上不可能であり、そこに編者の判断による選択が働いて当然である。しかし、これを使用の実態と照らしてみるとどうであろうか。

3. 事例の分析

ここで分析の対象とする事例は、「朝日新聞記事データベース」⁽²⁾にアクセスして得た同新聞1985年から92年までの8年間の本文データから取ったものである。スポーツ面など一部を除く各面が対象となっているため、内容の上では幅広いテキストが比較的容易に大量に得られるという利点があるからである。ただし、これはコーパス言語学的な配慮⁽³⁾を

した上で構築されたコーパスではないため、新聞の特徴として、政治・経済・社会など特定の分野に関係する特定の表現が集中して現れる傾向を示すことがあるなど、必ずしもこの種の分析の対象として最適とは言えない。しかし、これにかわる機械可読のコーパスがない現状ではやむをえない面がある。

上記のデータベースから「神話」の用例を検索したところ、全部で1427例が得られた。そのうち、「ギリシャ神話」、「建国神話」など第一義として使われているもの、およびそれに直接由来するもの（野球チーム名の「ギリシャ神話」など）が700例、比喩的な用法と考えられるものが715例、断片的な引用の場合などどちらか不明のもの12例であった。つまり、この時期の朝日新聞に関する限り、この語は2回に1回は比喩的に用いられているのである。以下では、「神話」がかぎかっこでくくられているかどうかは区別しないで、比喩的な用法と判断される715例を分析の対象とする。引用に際しては日付のみを付記するが、意味を明瞭にするため説明が必要なときは〔〕内に補足する。引用を本文に組み入れる場合はかぎかっこ（「」）でくくるが、原文中でもともと用いられていたかぎかっこは二重かぎかっこ（『』）に変える。

これらはその文脈に応じてさまざまな使われ方をしているが、比較的頻繁に現れる用法とそうでないものがあることも事実である。しかし、比較的よく見られる用法だけでも、国語辞典の記載にあるように1項目ないし2項目にまとめられるものではなさそうである。ここではその中で目立つタイプをいくつか抽出し、記述する試みをする。分析は、語構成的・統語的な特徴を主な手掛かりとし、それに連語的⁽⁴⁾な特徴からの手掛りを交えて進めていく。事例においては書き手（または話し手）がどのような意図をもって「神話」という語を用いているか判然としない場合も少なくない。語構成的・統語的・連語的な特徴という、外見に現れたものから取りかかることは、この場合、正当化できよう。

3. 1. 「神話②」の語構成的・統語的特徴

「神話②」が現れる語構成的・統語的環境にはかなり明瞭なパターンが見られる。名詞＋「神話」で複合語を構成する場合、「～の神話」となる場合、「～という神話」となる場合（バリエーションを含む）の、前修飾を伴う3通りがとりわけ頻繁であり、「神話的」や「～は神話（だ）」となる場合も絶対数はそれほど多くはないが目立つ。これ以外の環境で現れることは少なく、各々孤立している。

まず主要な3つのパターンを検討することにするが、これらはみかけほど不連続なものではない。「ロレンス神話」と「『英雄ロレンス』の神話」(85.10.11)の両方の形が並んで見られる。また「土地は値下がりしないという土地神話」(90.09.27)のように二重の前修飾を受けている例もある。さらに「『金融機関はつぶれない』の神話」(92.10.01)、

「金融機関の『不倒神話』」(92.10.01; 上と同記事)、「『金融機関はつぶれない』という神話」(92.10.01; 前2者とは別記事)の3つは使い分けられているようにはみえない。したがって、このパターンを整理し直して、(1) 人名との結びつきと(2) 節+「とう」との結びつきを両端として、その中間に(3) 他の名詞との結びつき、を考えるのが説明のためには適当なようである。その後この3つのパターン以外のものを若干見ることにする。

3. 1. 1 人名+「神話」

人名+「神話」で複合語を形成することは、「神話①」でも「ヤマトタケル神話」などの例があるから、「神話②」の固有の特徴とは言えない。ただ、この結合で作られた複合語で頻繁に用いられるものはなく、複数の記事に現れるのはごく少ない。これはこのタイプの生産性および臨時性の高さをうかがわせる。生産性については、「神話①」も「ギルガメシュ神話」など由来でない表現に対しても開かれており、差はないと言えるが、臨時性に関しては「神話②」の新語の特徴を残している部分と言えるだろう。事例においてこの種の複合語の前部要素となる人名は以下の通りである。

田中 [元首相] (85.02.06)、中江 [元投資ジャーナル会長] (85.06.05)、ロレンス [アラビアの～] (85.10.11)、ゴルバチョフ (86.01.16)、ビートルズ (87.01.09; 2例)、たけし [ビート～] (87.03.03; 2例)、マンデラ (88.07.21)、トビウオ [古橋広之進の異名] (85.08.31)、ケネディ (88.11.23; 2例; 92.07.17; 3例)、真藤 [元NTT会長] (89.03.07; 2例)、スターリン (88.06.18; 89.04.08)、レーニン (90.04.21)、レーガン (91.10.06)、太閤 (たいこう) (92.04.18)、江副 [元リクルート会長] (92.05.22)、寺山 [修二] (90.07.14; 92.05.24)、ファン・ゴッホ (92.05.09)、金日成 (92.10.11; 2例)、金丸 (92.10.16)、長嶋 (92.10.10)

このリストを一見して気が付くのは、ほとんどみなそれぞれの分野で(少なくとも一時的には)第一人者的活躍をしたり、高い評価を得たりした、ということである。このことは複合語を形成する場合だけではなく、人名+「の神話」という句になる場合も同様である。事例では次の人名がこのような句を形成している。

英雄ロレンス (85.10.11)、赤木圭一郎 [昭和30年代の俳優] (90.02.13)、エルビス・プレスリー (89.12.08)

すなわち、「神話」が個人や団体などに対して比喩的に用いられる場合、人々が第一人

者の人物をさらに神のようなものであると捉えている、すなわち神格化、絶対化、神秘化している訳である。いずれの場合にも前後に個々の行為に対する言及はなく、その人の人格全体、または当該分野での活躍を一まとめにしてこのような評価が下されていると考えられる。

人物に関する用法に言及していた国語辞典は、『学研国語大辞典』のみであったが、この語義解説の「...信じこまされたもの」という表現は否定的な含みを感じさせる。例文の「...過去の記念碑と化す」は、現在は（あるいは、書き手の主張によれば）それが成立しない場合にふさわしい言葉であると示唆しているようである。この点について事例にあたってみると、確かに、その「英雄」が絶対のものではないと主張するときに使われている例が見つかる。

「田中神話」に大きなかげりがさした...(85.02.06)

「中江神話」はすでに崩れ去っている。(85.06.19)

秘密報告はスターリン神話の暴露であり...(89.04.08)

ここで、「かげりがさす」、「崩れ去る」、「暴露」といった語との連語関係に注目すべきであろう。他にも「崩壊」、「崩れる」、「かげりがでてくる」などがあるが、これらの否定的な状態への移行を意味する語との連語関係は、「神話」が絶対の真実ではないことの確認、ないし書き手の側のそのような主張を示していると考えられる。

しかしながら、これに反する例もみられる。

半世紀後のいまでも、「英雄ロレンス」の神話は生きていた。(85.10.11)

「不屈の闘士」という”マンデラ神話”を増幅させている...(88.07.21)

色あせぬ「ケネディ神話」(88.11.23)

すなわち、「生きている」、「増幅させる」、「色あせぬ」などの持続を意味する語句とも連語関係を結ぶことがある。この場合、その人物に対する民衆の英雄視が続いているのであり、書き手もそのことを確認していると考えられる。このような連語関係にはなくとも、「トビウオ神話」(85.08.31)が古橋広之進の半生を描いた映画であるとすれば、ここに否定的な評価は少しも入っていない。また松下幸之助の死を伝えるニュースに

「経営の神様」「納税王」「立志伝を地でいった人物」...さまざまな「神話」を生み出し...(89.04.27)

とある場合も同様である。国語辞典の多くが「根拠なく」という語を解説に含めるが、この用法には合致しない。

結局、「神話②」を個人に関して使う場合、その英雄的性質のみに焦点をあてるタイプとそれに加えてその英雄的性質の虚構性・非絶対性をもうきぼりにするタイプと2種類あることがわかる。事例においてこの2種は18例と14例(不明1例)という、あまり差のない数の出現を示しており、どちらか一方のみを一般的なものと認めることはできない。

3. 1. 2 節+「という神話」

この、神話の内容が同一文中で節の形で示されるパターンも非常に多い。このパターンを例文に挙げている国語辞典は、見た限りでは一種もなかったが、「～といった神話」や「～、この神話」などの変形も含めて、また、二重の前修飾がつく場合も含めて、同一文中で内容が節の形で明示的に示されるものは全部で106例という数にのぼる。

これは「神話①」の現れ方と大きく違う点である。「神話①」に節+「という」が前修飾する例はほとんど見られない。実例では「神話①」は「神武東征神話」や「日本神話」というように物語全体、体系全体を指するのが普通で、その中の個々の出来事を指すことはあまりないのである。次はそのまれな例である。

プロメテウスが天へ昇り、太陽の火を自分のたいまつに移しとって人間界へ持って来た、というギリシャ神話の1節...(89.04.14)

各地から集まった神々が紅を塗って神楽を舞ったという神話...(90.11.02)

ヤマトタケルノミコトが病死し、魂が白鳥になって飛んで行ったという神話の記述...(91.07.05)

これ以外にもギリシャ神話や日本神話の中の個々のエピソードに触れた文があるにせよ、「～という神話」の形はないのであり、この違いは注意すべきであろう。

すなわち、このパターンでは「神話②」は一つの節で表される一つの命題を内容としている。一つの節であるから、あまり複雑な内容ではありえない。いくつかの国語辞典は語義解説に「物語」や「話」という語を用いていたが、このタイプの解説としては適切ではない。

「神話②」がこのタイプではその内容を明示する節を伴うとして、その節はどのような属性をもっているであろうか。一見して気づくのは、総称文や状態を記述する文が圧倒的な大部分を占めているということである。

土地を持っていればもうかるという神話の打破...(90.10.30)

婦人服は景気に左右されない、という神話は大きく変わり始めた。(92.04.12)

日本の飲み水はよい、水道は安全だ、という神話はすでに崩れている。(92.04.26)

節+「という神話」のパターンが個々の出来事や行為を指して使われる例は非常にまれであって、次の1例しか見られない。

スターリンが独ソ戦の勝利に決定的役割を果たしたという神話を、粉々に打ち砕いてしまった。(88.07.28)

この例では、ある一つの行為を「神話」と呼ぶことによって美化しているが、一般に節+「神話」の使い方では、「神話」はある命題を普遍的・絶対的・恒常的なものとして示す働きをしていると言える。

命題の内容に関しては、肯定的なものが多いようである。上の例にある「もうかる」

「左右されない」、「よい」、「安全だ」のように、安定、上昇、成功などを意味する語句（または、その反対語の否定形）が含まれるものが78例を数えている⁽⁵⁾。もともと、調査対象の期間は地価の高騰が社会問題化した時期を含んでおり、土地に関して似た表現が何回も繰り返して使われる状況にあった。この数字は多少割引して考えるべきであるかもしれない。このことは新聞をこの種の調査の資料に使う際の一つの限界を示すものである。次の例のように、内容が特に肯定的とも否定的とも考えられないものも、それよりは少ないが、17例見られ、全くの例外と考えるべきではなかろう。

白人はなま魚は食べないとの神話は崩れ... (86.06.05)

日本文化は理解不可能などという神話は、追いついていくことができるでしょう。(88.12.24)

一方、「失敗」、「危険」など、否定的な意味を持つ語句を伴う使い方は例がほとんど見られず、次のものだけが辛うじてそれに近い。

野党に政権担当能力がない、という神話が作られてきた... (89.09.11)

「逆らうと怖い」との「神話」を生んだ。(89.05.15)

このように、この用法での「神話」が表す命題の内容は、厳密な制約ではないものの、中立的なものから肯定的なもの側に傾いているといえることができる。このことも多くの国語辞典の記載に反映されていない。

前節で見た人名の場合と同様に、否定的な状態への移行を意味する語との連語関係は明瞭である。上の例にみえる「打破」、「変わる」、「崩れる」などの語との連語関係は確かに49例と非常に多く、人名との結びつきの場合よりも強い傾向を持っているようである。これは、当該の命題が実際は（あるいは、現在は）成立しないものであることを、書き手が言おうとしているときに使われやすいことを示す。しかし、これと並んで、「できる」などの生成を意味する動詞との結びつき（9例）や「続く」などの持続を表す語との結びつき（28例）も決してまれではない。

一流企業や大企業はつぶれないんだ、という神話ができた。(85.08.14)

「新規公開株はもうかる」という「神話」が復活した形だ。(89.09.28)

「倒産しない」という神話をはぐくむ... (92.07.28)

結局、神話は「生まれ」、「続き」、「崩れる」ものであり、そのいろいろの相で捉えることができるのである。

ここで具体的に「土地を持っていればもうかるという神話」について考えてみよう。実際に土地を持っていて儲かった人はいた。しかもある時期には多くいた。つまり、「土地を持っていれば儲かる」という命題は特定の条件・限定の下では成立する。「日本の水はよい」、「白人はなま魚は食べない」なども同様である。この個別には成立する命題を「神話」という語によって普遍命題に転換している訳である。個別の命題の成立の条件を

外して普遍的・一般的な命題にした形で信じられるようになること、これが「神話が生まれる」ということであろう。そして、その神話は一定の期間続き、ある時に再び普遍的に成立するものではないと認識されるようになる、すなわち、「神話が崩れる」のである。ほとんどの国語辞典にみられる「根拠なく信じられている」というだけの説明は単純に過ぎるように思われる。

3. 1. 3 その他の名詞+「神話」

人名以外の名詞が「神話」と直接つながって複合語を形成したり、助詞「の」などによって結ばれたりすることは非常に多く 427例（節+「という」との二重の前修飾のもの24例を含む）もある。ただし、調査対象とした期間の特殊な事情として、「土地神話」の例が163例と極端に多い。これは実際の新聞紙面での使用ではあるが、全体としてみた日本語の使われ方を公正に代表したものとは言えないであろう。

名詞+「神話」パターンでの複合語の前半に来る名詞の分布はおもしろい。一方において「土地」を始めとして「安全」（32例）など頻繁に一緒に使われるものがあり、もう一方には「同日選」（88.01.30）、「新車」（91.12.17）、「脱酸」（92.02.10）など明らかに臨時的なものがある。

一般の名詞+名詞の形の複合語や名詞+「の」+名詞という結合の場合、前部要素と後部要素の意味的關係はさまざまである。ここでは後部要素が「神話」に限定されるが、それでも前部要素の多様さのために両者の關係は複雑であり、分析しにくいところがある。

比較的取りだしやすいのは節と同等の働きをしていると考えられる名詞を伴う場合（92例）である。サ変動詞化・形容動詞化できるもの、抽象名詞（「耐久性」など）、それに「不敗」、「不倒」などは多くの場合節の述語の働きをしていると考えられる。このタイプではさらに節中の主語に当たる名詞も前修飾に加わることも多い（41例）。例えば「銀行安泰神話」（92.04.30など）は「銀行は安泰であるという神話」と「社会主義の優位性の『神話』」（89.10.24）は「社会主義は優位にあるという神話」と意味的に同等であるといえる。

このタイプでは、連語的なふるまいについても3. 1. 2で見た節が前修飾するパターンとはほぼ同じことが言える。一つには、節の述語に当たる名詞は上昇、安定、成功などを意味するもの⁽⁶⁾が圧倒的な多数（82例）を占めている。中立的な意味を持つものは目立たず、否定的な意味を持つものは「社会主義の恐怖神話」（89.07.25）、「”巨悪”神話」〔中曽根元首相に関して〕（89.10.22；89.10.25）、「カマキリの夫殺し神話」（90.01.21）、「男性結婚難神話」（90.05.20）など8例しかない。また、「崩壊」「打破」など否定的な状態への移行を意味する動詞が続くことが多い（215例）が、生成、持続を意味するものが続くこと（それぞれ27例、45例）があることもまた同様である。したがってこのタイプ

は3. 1. 2で見た節による前修飾のタイプのバリエーションであると考えてよい。

上のタイプに似ているのは、節の主語（または話題）に当たる名詞のみが前修飾している場合である。「土地神話」、「銀行神話」が典型例である。これは「土地は値上りするという神話」や「銀行は倒産しないという神話」の省略形であると考えられることもできる。省略しても文の前後関係や従来の使用例から読者が完全な節を復元することができると思われ、書き手が期待するのは必ずしも無理ではない。これも前項同様に節による前修飾を伴うタイプの変形と考えてよいかもしれない。

「～という神話」の場合のように同一文中に節がなくとも、前後関係で容易に「神話」の内容に当たる節を復元できる例もある。しかし、かなりの推論を巡らして始めて内容が想定できる例も少なくない。例えば「クルマ神話」(91.01.09)の内容は「自動車が理想の交通手段だ」ということらしい。これは、原文ではこのような形では表現されておらず、書き手の意図を推測したに過ぎない。これが書き手の意図した内容と同一だという保証はない。

さらに、例えば、節+「という土地神話」の形で二重の前修飾があるものでさえ、その20例の間で節の部分の表現はそれぞれ微妙に異なっており、命題として見ても一通りにはならない。実例には「土地は絶対に値下がりしないという『土地神話』」(88.01.20)、「将来も地価は値上がり続ける、という『土地神話』」(88.09.25)、「土地は最良の資産、という土地神話」(90.10.24)、および「土地を持っていれば損はしないという土地神話」(91.10.03)などがあるが、これらは似てはいるものの、命題としてはそれぞれ別個のものであり、これらのうち（あるいはその他の選択肢も含めて）どれを復元するかは読み手に委ねられている。すなわち、「土地神話」という、主語（話題）に当たる名詞しか前修飾していない場合には、神話の内容に関して曖昧さが生じて来ることになる。

単に命題（節）の復元に関して曖昧さがあるだけでなく、命題（節）の復元が不可能な場合も少なくない。臨時的な用法であって、前後関係によっても節（命題）が示されない場合である。「ドリンク神話」(89.06.21)は他の表現で言い換えにくい。文脈から判断すると、「半信半疑ながらも、ドリンク剤が効くと思って、ありがたがっていること」くらいに当たるらしい。ここでは書き手（この例では、実際には取材を受けた市民）が最初から特定の命題（節）を念頭に置いていないと考えざるを得ない。むしろ、書き手は意図的にこのような曖昧な表現を利用していると考えられるのではないだろうか。形式上の曖昧さによって、内容における曖昧さを際立たせ、それによってその事物（ドリンク剤）や事象（効くと信じていること）にまつわる神秘性を表そうということである。これは一種の神格化であり、人名との結びつきの場合に近いようである。「巨大科学」(86.02.15)、「DC」[ファッションで](88.06.07)、「ルネサンス以降の欧州絵画」(89.06.28)、「健康」(89.07.07)、「ササ・コシ」[ササニシキ・コシヒカリ](90.07.26)、「セレブ

リテイ」[有名人](90.11.25)、「アバンギャルド」(91.01.04)、「ブランド」(91.01.17; 92.12.23)、「モダニズム」(91.01.07)、「マルクス主義」(91.11.02)、「『前衛』」(92.04.06)、「具象彫刻」(92.03.28)、「ロボット」(92.09.23)、「王室」(92.10.02)、「湘南」(92.12.03)「革命」(92.12.06)などがこのような神格化の対象になっている。人名の場合と同様、いずれも通常もすでにある程度一般の人の称賛の対象になっているものである。ここでもその虚構性の含みが加わるタイプとそうでないタイプの両方がある。『学研大國語辞典』の③はこれに当たるものであろうが、これはとりわけ代表的な用法ではない。

団体名が「神話」の前につく場合も同様である。「東大」(85.13.19)、「サントリー」(85.04.01)、「ロイズ」[イギリスの保険会社](85.09.06)、「ソニー」(88.01.10)、「巨人」(92.04.04)、「アスキー」[ソフトウェア会社](92.08.20)、「竹下派」(92.10.16)などが現れている。しかし、ここでは東大神話の一例を除いて、いずれも絶対性を否定する文脈で使われている。

保険に「愛情神話」(92.03.21)という商品名をつけ、ワインに「葡萄神話」(92.04.26)とつけるとすれば、神秘性を表そうと意図してのことであろうか。少なくとも虚構性を指摘する意図が入っているはずはないであろう。

「就職神話」(89.04.08)は「就職にまつわる諸々の俗説」ということらしい。「ライオン神話」(86.08.19)、「数の神話」(89.06.14)、「中東『神話』」(90.09.30)、「強姦神話」(90.10.04)、「ライオンの神話」(90.12.09)、「国際協調の神話」(91.06.26)、「内申書神話」(92.08.29)、「年齢神話」(92.11.27)、「偏差値神話」(92.11.29)、「ユーロ神話」(92.12.03)もこれと同じタイプであろう。多くは虚構性を指摘する文脈で使われているが、「数の～」のようにあまり明瞭でないものも含まれている。

しかし、これらのタイプは臨時的な結び付きが多いことから分かるように、「神話②」の中でも特に比喩的性質が生きている部分であって、タイプ分けは難しく、これ以上の一般的な分析はなかなかしにくい。「”民族神話”」(86.07.09)は「脑梗塞で倒れた田中元首相に対する地元民の変わらぬ支持の気持ち」を表しているようである。地元民を一民族になぞらえ田中氏を神のように崇めているとたとえているのであろうか。また、曖昧さを利用するという書き手の意図が独り善がりになってしまうこともありそうである。少なくとも筆者は、「米ケンタッキーでの馬取引の神話」(90.08.05)での「神話」の使い方は理解できなかった。

3. 1. 4 その他の結びつき

上記の3つの主なパターン以外で比較的目標立つものの一つに「～は神話(だ)」⁽⁷⁾のパターンがある。

日本人の「単一民族説」は神話であること、…(88.07.22)

仕事に夜の付き合いが欠かせない、というのは神話だと思いますよ。(89.08.29)

『三省堂国語辞典』はこのパターンを用例に挙げるが、実例での絶対数は11例と少ない。しかし、ここで特徴的なことは、全て否定的評価が加わっていて、「虚偽」ないし「俗説」との含みがあることである。また、「は」の前に節が来る場合その内容が肯定的になる傾向を示さない。「安全」が含まれる例が1例あるだけである。これらの点からすると、例が少ないため確実なことは言えないが、一見したところでは似ている「～という神話」のパターンとはかなり違った特徴を示す一つの独立したタイプのようなものである。

「神話的」として現れる例もほぼ同数(13例)あるが、このうち虚構性を示すような例は1例しかない。むしろ、

EN A—この言葉は、…ほとんど”神話”的な響きさえある。(85.02.16)

マンデラ氏の神話的影響力(90.02.03)

のように、虚構性ではなく、偉大さ、神秘性が問題となる例が8例と半分以上を占めている。「神話だ」と「神話的」との間にこのような逆の傾向があることは興味深い。

3. 2 その他の連語的特徴

語構成的・統語的特徴との関連における連語的特徴は3. 1の各節ですでに触れた。それ以外のものとして、『大辞林』の「思惟や行動を…拘束し、左右する」という説明によく合致するものがある。

映像は客観的だ、という古くからの”神話”に、裁判所が取り込まれ、…(85.01.04)

「取り込む」のように人を影響下に置くことを意味する語⁽⁸⁾との連語関係がそれである。しかし、このような連語関係のない場合、つまり大部分の場合には「拘束し、左右する」という強い表現は当てはまらないようにみえる。『大辞林』のようにこれを「神話②」の代表的な用法とみなすのは無理であろう。

他に目につくのが、性や家族に関係する語である。「過去の家族の神話」(86.07.01)、「生殖神話」(89.03.26)、「結婚神話」(89.06.20)、「男性結婚難神話」(90.05.20)、「強姦神話」(90.10.04)、「家庭神話」(91.11.17)、「カラダ神話」(92.08.16)、「『母性神話』」(92.11.11)が見られる。この結びつきが多いことは「神話①」からの意味の派生のしかただけではなかなか説明しにくい。『ジェンダーの神話』(A. スターリング著、工作社、1990)などの書名にも類例が見られるが、この分野では外国語の影響を受けて「神話②」を比較的濫用するのではなかろうか。

「自我神話」(90.06.06)、「未知なる自分の神話」(91.12.12)の2例も、かなり孤立し

た異例の結びつきのように見える。これも『フリークス―秘められた自己の神話とイメージ』（L. フィードラー著, 青土社, 1986）などの書名を通しての、外国語からの影響が考えられるかもしれない。

3. 3 特徴的なパターンを示さないもの

上述のようなパターンを示さないものは139例ある。その内、見出しに現れたものが30例を占めるが、見出しでは省略的な表現になりがちなのは容易に理解できる。もっとも、新聞記事をデータに使う場合、見出しの扱いについての基準が必要になるであろう。また、「神話」が同一記事中ですでに十分な限定を受けている場合（36例）も、この語が自由な環境で現れることも不思議ではない。それ以外の場合、すなわち、真の意味で自由な環境で現れる場合（73例）は各々孤立しているようで、なかなかタイプに分けることができない。これらも書き手の創意が生かされる比喩性の比較的残っている部分のようである。

86年3月16日のソ連の指導者達に関する記事では見出しも含めて11回も彼らに関する噂のことを「神話」と呼んでいる。同じ執筆者は同7月3日の記事でもピアニスト、ホロビッツにまつわる評判のことを3回「神話」と呼んでいる。これは個人的な文体によるとみなさざるをえない。

その他、「虚偽、俗説」と言い換えられそうなものが11例、「英雄の活躍」と言い換えられそうなものが15例ある。「神話のひとけた」〔日航スチュワーデスの期による愛称〕(87.06.16)は「神話①」の「古代の」という意味特徴に焦点が当てられているまれな例である。「崩れた『神話』」(88.08.09)は、「駅名の由来についての想像が誤解だと分かり、謎が深まった」ということらしい。一般の人々ではなく、特定の個人が信じていた事柄に関して使われた珍しい例である。

91年3月20日の記事にはロラン・バルトの『神話作用』への言及があり、「写真の神話」の例がある。これに代表される、現代思想におけるこの語の使い方（「まやかしの暴露」）からの影響はほとんど目立たない。

4. まとめ

本稿では「神話②」の用法の全てを網羅できたわけではない。この比喩がまだ生きているものである以上、当然であろう。しかし、比較的多用される主な使い方は扱えたはずである。

比喩的用法の中でも比較的定着しているものがあるが、国語辞典の記載が示唆するよう

に1あるいは2の語義にまとめられるものではなく、いくつかのタイプに分けられる。比喩の対象としては、人間、命題、事物・事象がある。人間の場合は第一人者の人物が対象となり、命題も絶対ではないものの中立から肯定的な意味のものに傾くが、事物や事象に関しては通常もある程度もてはやされているもののタイプとそのような制約がないタイプとがある。それぞれを神格化、普遍化、絶対化、神秘化するところにそれを「神話」と呼ぶ比喩が成立する。しかし、その虚構性をも含意するかどうかにより、さらにタイプが細分される。

日本語のコーパス言語学はまだ緒についたばかりである。その前提となるコーパスの整備などの条件がクリアされれば、本稿で見た比喩的転用の細かなタイプのように、従来は見逃しがちであった日本語の様相をより明確に捉えることができるようになるであろう。

注

(1) 他にこの語義を収録しない辞典として、時枝誠記編『角川国語中辞典』（角川書店、1973）、山田俊雄他編『角川新国語辞典』（角川書店、1981）、山田俊雄他編『新潮国語辞典』新装改訂版（新潮社、1982）、『講談社カラー版日本語大辞典』（講談社、1989）がある。

(2) 朝日新聞記事データベースに関しては、次の紹介を参照。

中西英「新聞記事データベースを使いこなす—パソコン通信によるH I A S Kの利用—」『人文科学データベース研究』第5号（1990）37-49.

佐藤宏秀「H I A S K（ハイアスク）—朝日新聞社」『日本語学』第10巻（1991）8月号、95-98.

(3) コーパスの設計に関する議論は J. Sinclair, *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford Univ. Pr., 1991, を参照。同書18ページでは、出典を多様化することが緊要であると指摘し、新聞の英語は英語の一変種に過ぎないので、信頼できるサンプルではないと注意している。

(4) ここで「連語」は collocation の訳として使っている。語彙項目の習慣的な共起関係のことである。

(5) 他に、「つぶれない」、「大丈夫」、「値下がりしない」、「損はしない」、「しくじらない」、「利益を守ってくれる」、「強い」、「不滅」、「支配している」、「倒産しない」などの語句がある。「客観的だ」などは含めなかったが、個々の語句をこの類に含めるかどうかの認定には厳密さを欠くところがあるかもしれない。なお、地価の上昇が万人にとって都合がよいわけではない。ここでは、このような現実世界での意味ではなく、あくまで単語として安定、上昇、成功などを意味する語句が含まれるかどうかを、その命

題が肯定的かどうかの基準と考えた。

(6) 他に、「上昇」、「成功」、「復活」、「再生」、「無謬(びゅう)性」、「復元」などがある。

(7) 「(だ)」の部分に実際に現れるのは、体言止め(3例)、「である」、「にすぎない」(各2例)、「です」、「らしい」、「に」(「なった」が省略か)、「だ」である。

(8) これに類する語として「とらわれる」(3例)、「とりこになる」、「脱却できない」、「自縄自縛になる」、「囚えられる」、「惑わされる」、「とりつかれる」、「踊らされる」、「こだわる」、「人生を狂わされる」、「目くらましに遭う」、「びくつく」、その反対語として「解放」がある。